淡々文集

前編

一

イ4
3157
15(1)

序

玄之又玄衆妙之門淡之又淡衣味

之至澤有四楊明之三楊一以德顯

一以位彰名因賓之賓實豈不符

於名吾識三楊子淡者先知其名

於三楊子者誠諸之雄也其原出於

14
3157
15
(1)

貞翁之傳於晉子楊暮亦承青
焉云至所著俳文若干篇籠扑鱗
呑鉢鄭珠纓採毫吐頃刻竟
帙可謂巧矣可謂怪矣集成請
序於予也不敢方俳諧述其所見以
贈或曰子儒雅士序俳諧於身何哉曰

吁固哉言也詩不云乎善戯謔兮
不為虐兮昔在三代之時以戯參九暢
之象以戯謔備大禮器於其祭具
夫自天地之分觀之於宇宙無
物不事不非戯也太白所謂女媧戯
黄土摶為愚下人良然竟以下地

者一大劇場也造化者大劇之主也
萬物者生末浄旦也死生得失哀
楽栄枯皆演劇也醉場歌閣雅
俗名有無之腐儒學士於孔
口談笑治乱髙自標異以為得禮法
自我観之抃亦惟戯而已無足謂

之戯亦戯耳 文字禅 遊戯三昧於
場之文庶幾於覧観

寛保辛酉星夕集滄玉舟撰

序

物茂卿識和歌云三十一字侏離之言不足道蓋东人而華其技者固一家云耳而伯陽嘗評予曰玉露凋傷楓樹林美則美矣不如我猿大夫紅葉蹈鳴似人

易歳之爲愈也。伯陽善摹音
綜情之藻林。其品不出於乎下。
而云也如此。可謂玄言者哉。夫
俳諧者古國風之一變。降而爲今
之俳諧者已尚矣。抑與人弄謔与
詞長乃能矯俗于雅。揉雅于俗。目

中無不可象之景。心曲無不可説
之情。上可以告
玉皇天將。下可以諭牙儈居兒。亦
一種風流也。頗似陶意中人。
之論已。段令兹見之不覺欣
然亦顚而曰勝讀窮措大之學詩

矣。孰謂諧之道汙下耶。三楊氏少
從東都寶晋子学諧。其焃句也。
去皮得骨。去骨得髓。其如天呉
九首卷潮。一口噴玉。幻如術士叙
黄魚傾黒巢。不見其縫。鋭而一奇
畏老衲撿人隻笑射倒塵中

登豔而一冷。如雛妓携其枝迎
歡眼。澄変態而出左右之原。
其諧寸哉。日晋子之諧歌海内者
凄矣。能磨諧文不著軟棋集則
于世。惜乎人亡集存。寥々乎無復
吟矣。三楊氏克継其志無與至

輙修文辭以自樂英華精彩。亦
諧謔之餘也。昔宋太尉袁淑采文
章俳人之笑者次而類之名曰俳諧
集。蓋文章而俳諧者也。亦東人
假女字寫男稿者。徒然草為之最。
而栗白集殿之皆以源語枕艸為

藍本而間名之。未嘗少俳諧寓
者也。吾與楊則俳諧而文章寓
者非邪。予冠經而佩史。爺宣尼
而孃迦文。迺文迺詩。乃詩餘。乃
傳奇。乃和歌。乃俳諧。性靈攸發。
莫不染指。以奈二子於諧社為金

業久矣。今會余茲編成、請覓。
因筆於云授之
寛保辛酉秋九月
赤松山口氣毛屋士郎

書通 上下略

此度文章之四篇之序跋二ツ進ら法正筋不叶候
序ハ中法序アリ候半
一此諸之文章とアラザル八格ならて和文章とアラザル又一
篇見之可成先達流筆誦り可候実始乱始実稱乱
始実終実合体四季叙被跋体とアラザル皆三遺記
然て見當ア候り可也
一此諸文章を集めたる格別の一書と見アリ不然
歎とも之遺記之教もなく家伝別書可有之
承抱之不苦可成段猶笑候

一御傘之外題に俳之字文季吟増山の井四季の不
俳之字ほと文飾の字ありと云不知り給ふなり
一庭人桃々青額之序に桃青子没後準的僊に
も称く風流滅しまての数十年と知り十年と及
ふ八先師之付ハ案香而已にて其志八数十年と六
今日まで至りアは俳諧消長を知り今羅人附子新
志を立つと知り序跋を選ぶ者を参る事能はしき
一世を接る八如何して我門下之詞宗ともいふべき子
有之ても知り得べき
一源氏之下に禁裁句につゐけたるに案理にかなひたる可一向之

使境を不逃捨がくなくすりわり素本意を失ふ様なる
ことなり
一師道之ても其之ちを此道と云者多し師道が名高き
者あれハ弟子必上手と云事も知し聖人之千之弟
子諸子不の四又人とやへし下手ハ此道にも上手有之も
あり先ハ如何し盗跖柳下恵がきさ肉身ナも其兄
も性によるへし上手ハ弟子に下手も多く及べたり
右六ケ条取らくゆ
返事 上下略
其もなきと云事之宗長発記之見へたり
花桃有て無ご是非路競馬之比尋及歷ア答ト

誹諧文章ハ月雪花鳥日本之名所ニして等ニ云
あらく拘皆和文章と云ふあり拘證術ともにかはり
なる事之遺跡ハ不拘く人ハ和歌の所きと云不知の
不ミ和ア々小俗呼てきびしきらなるを見ハ能きたい
ごんと云其志皆誹諧と云事是ニも志し他人の云
事之遍て誤るに忰る事あこれと云諸ニ年季之
奴僕も云なるハし口癖のやうに只のたゝ人言を以ふ之
俳諧文章と云ニハむさと俗語をつかふを不ゝ死ゟ
彼ハ真を面白たてたんごんと云人ハ誹の字ニ人偏ま
きくひあるへし俳の字を中く俳諧を不知ゟ是ハお係

けなくとくと云ありゟハ杯を志ける事也法傘の外結ハな
尾之中なるや又増山の井の季節不の俳乃字ハ季に変して有る
事ありあり之云季之又ハ者とて讀む季俗語も称り又人偏
言偏草まて本經れる不も珍之此れる等ハ中奥より云差の
誠の字を貴し々る事同痛りゟな道之奥を傳へゟ於て俳
中ゟ人皆誹諧を不学んして俳川の流之論る之八雲御抄之
説目も偏ゟ中誤りたる不も有り且又此俳文を序る事写之云
出之アり不言成敷と云四ゟゟ

かゝ扣ニそむきてむかふ花の影

誹諧ニハ命のなれ季体なる句なりやめ句関家々之

紙

清しきへ

此御文ハ芭蕉翁の湖月筆にて綴り給之今ニ所持致ス

又

使ちとみへるわか輩にもしるへし今の流誹

の句をかくもありへしや流の句をもして綴り給之

発句ハ林々君也御抵を　中院内府公御深筆なされ候

誹ニ長田家の風雅の紙様なるへし去ル比来の審

お出へし其角没テ後誹諧甚廃す事となし文字様

の人なるへし風風不ニ成止ルとても寒號其のことく好みて流

道の黒白をわかすあるハしるに及らすあ関にもよるなし嵇（セキレイチ）

質ゑハ馬ありと定るとくひなるらん甚可笑十指十目也

云流ハ親々に吐て一筋くの事不案内にも活機酩酊（メイテイ）の（オナニユイ久ル）

平野是て海にこの姿か

師匠てもなきをおとなしらす時代遠ひ教多けり続くも免

ホを猪猴の備あてハ植立を勤しの心うを事といふ川

うみえくなるへしさすれ風雅の道にても名字を筋よく筋

詠しくるとのみてくたり可責にも及ましくて会佛世間祥天

魔といひもしそる日蓮ハ師匠よも上手にもあり

源氏を句にとりて例くまちやうさく談にて又ごおくを

かゝらすのことゞもいひ出たりこれらくのよしなに云不好を
心のおもむきのまゝ白ゆゑいやなることのありて文章に
紫雲の事催馬楽(サイバラ)なぞよみし源氏にも教多かりしを（琴ノ名ウタ云）
長谷もこれより文章には源氏によりて天竺文章
とらへし用るを指るゆゑ知りつきてはとゞめる物にて
とありやまずらめるそれのよし無には縁語の文章有を
いやに突へり説ともおなき書びんのやくいふ事半取る有ゆゑ
文章もとへしさや諸附ハおほみれはつなれ源語
を引て其場を補ひ侍り書写人を都し無つらひ無
文章に半似らよし一字をも改ぬをも引よるてゐるは

もとへし上文打老まくも擬り文章を没ばされを不弃(ステ)
して一派のんぬに一冊となし尸身子も有へしや反
古となりても無理ならんずてゝは書肆梁の外として
志（丹波屋佐兵衛之）曰く是をもて不正鮮老安にむつましく是有
所に志ありもぜ南紀祇園先生京府梁田先生、叙
をものに合遥(スミカ)に来てまかりし波ふれ夜啼鳥を愛し雲
来の有依家の宗とせ硯に入がたし黒白おの住にのうきら
でも明らかの也もとも上三鳥君之跋有り首尾調べ欲しく侍
半なる新序を益山の主梅桐語係の篇り桑に乱
篇中の胡寛黙れ趣微細に之を秘蔵ありし一本を写る

の床堂法弟子なる 先座口嵐山の銘に

石是石也意旨如何望車間不容髪喫

相用車武士之甲冑山伏之兜巾

ぬのさけて床の上にそついちまる三千

世界九千八海

馬子判

見みて嵐山の様意海なるや

淡々文集巻第一

目録

壱 飯のよし筆

二 排假を附す辞

三 求尊の説

四 梅雨に坡小船を泛ぶ

五 雑話盗人之禅

六 吉波州

七 楚八四日経渡

八 東賀へおくる

九 恵南律師稀年賀
十 春日留花婦し人ニ酬ふ
十一 琵琶湖
十二 雑話六章
十三 積皐禅を悼辞
十四 珪珠旅窓く悼る文
十五 紀陽の樹亭に題ふ
十六 竿秋を送るに序
十七 病臥并賛
十八 富天ありおくる示教

巻一 飯乃辞

眼に愛し耳をよろこばしむるもの。喉咽(ノミド)ば
うく支。茶に魚子酒を蓮に。やまかくきすの杖
毎此慕ひ。初音紫舟押わかれて。すくといひ好
むと名つけたる品を盡し。今古風流を境(ワチカ)にし
是皆んを書に境あり辞。実に瞬七亭の脇
従来飯を愛して至て好めり。されば百貫注
芋かしら我喰盡しきれば。独りそのわき腹うち
ゑみたる意をあらはしぬ。このはらしたしく物く高尚
ふしく異なり。此飽し至て精く腹乃はらく

瞬七亭ハ大津ノ角上也
百貫ノ芋頭ハ徒然艸

みも叶ひ。味ハ蕗へハ蓴菜ある人の箸にイみ。ん
あてみる鞍の音にまかふまゝ二ツ三ツ行うして珍ち
ゝうた鐘鼓と。是より出地神に添へ。あかくとみつ
うり音して静に走り尊におさすり。又頼メて記を
高安の女 いせ物語
うふ喚るに驚し。高安の女も此めしに飯匕としてえ
さんうふんたちのふましきや。器投うゝす凝てら
きていひけり山のやき桜。飯顆山頭の夜雪嵐に
居士ハ四休居士也
飛々とし。四季折の野菜を煮て居ちゝ移ち
うくまちせ作りハ頼たる体して休せん。蓋めしと
云ものを知りぬ人なし。一椀さハやゝに二椀食餅

の陀うまを拂ひ。三椀嵐のさそうをとゞめ一句たち
まちぬとふすゝきん。白めし抄き飯うちと前
をゆ宿枕を言ふして千とせ栽睡る。勝匕
草堂に招ん人ハ。齢八十八乃月を稀なり
すゞ家信令んといふめしく出との葉をなかくん
ことしをス

文りもこゝそ稀の香添ととり
堅田八良業ノ生九也
半日招ひ乃千家盧にしてたりつわく述く
第二 精能を謝してう葉
大君風雅に幽。吉淋く月を田舎の郭をむ云へ。

津別業の花乃春ハ筆尓吟え。秀れ松ひ奥の行かひちの筆尓清かなり。惠てのさらとも夏をくして近し。遠きハ光琳乃へらてちれ秋清鴻孫乃なかハしとかや。此日いろ成日ぞ。家州庵尓惠み多ふもの三ツ。雲む臺中千香茶合み。宇治の橋姫ちしなく袖を霞ひ。青苔白千清して立田の蝶を奪ふ。土まで出まやうなまれまつらみ川うらの佳さまひるよし。清くむすれとしにくしけ尓坊や しハ、甲處きハなき押ら清まて。虎ら光梅かくと

雲花ハ茶ノ一名

有さみけるく。腰ちの波を跳ねて夕風をさきらて。名古屋れさらぬも今成りぬるきハあらば。雨の濡のまくだ坊けるにぞ。標らすきと号て佳賓子瓢をとへき坊さまを梅のし。今一ツハ志うきたらし良切も。うちち銭なる斗り尓風乳のふ坊りておとこう隅しく。誰兄家雲の袖やいもんや去乃尓葉れ白ひなり言られハ鷗鵠枫とア坊へり。梅くさ尓あく衲ハ秋の木よ長哉。炉火尓乳多いとく底しくを待る

第三 愛蓴説

愛蓮ハ
愛蓮ヲ
対スル説也

水の艸。陸のはなを愛る中に。世人ハ花の富貴なるを
もてあそひて。唐比名を付ケ弄ぶを加へ。風雅をいふ
者あるに於ハ作りを剥て橘茂せる。菊好ル人のむつひ
くや思ハんずる枝あふれ香風の遠きむハ清し。蓮葉
ミ泥より出て。小奈塊の胡日にハたゞ露き。夕陽に乱
れ。君子をも称くあはれのとなりて。亭ゝ茎亭乃
器に擎て。盃の数一盌喫茶

志ゆんさいの中於く八首気あつゝ

かゝる横川の
ほとりにおもく
上略
茗氏ノ歌

おもかけにすゝまる古きのとも。横川はたく水月殊に
としれこその関のさかりにそむく。涼もいくハ夜あき

廣成か相
文まこの序
後ヲ以ス

薬のさかり。初野をも不待咲の桜をも欺すむむへなり

廿四 城西の坡に亭を結ぶ

日成桃花いそんして路をなし。柳絲(ヲモムロ)に吹
て水波静なり名と。流ゐに化を亭を流れハ梅
従て風にかこ添ひ槃(カチ)に落きくり。天清く鶯
し。鶴なこ子に従ひ行にも放(ホウイン)して。路にあり
ひ芳の心哉捜し。何く里と知くゆう袖かけれ
すも。随え々筑る波よけ山にいる。不予志くいふさ
けして情(ツラク)杉ふて。亀の袴を初てる萬人の譬
を搔し。廣茂からしハの枚を並へてよくゑしを流

うふ労切の名ハ山よりも重くなす業ハ毛ふを
是も軽し。此山絶頂ニ大坂へと舟ちも爰ニ高し。
千松おもひきる出る帆を送り。ちとり鳴居
卵のむれ白ひを配す。孤岸要と成て波の扇
をそむ。国ま一世忠切なり。志ても今安々まし
や。おほやきのはめくみほうしねハもく家秋
使ふ平下れわぎねひハこ毋うしおし。諾
度の国く此香を積る船をそ子ヲ以敷ふ。
家くの下志あく白く深遠く画て。布稚蔵
竹ふきさみ。志るし拙りのち治世の風流を

吹し。月ふ照りをちみ。衣をこえへてぞなれ
ゑの價の袂をゆしきふ。川口ハいきほひ。
大江田子のく名ハ行きして百家今茶家の勢
ひ。三笠れ山耳出しほうもわしを耳行りし
ことあのはとらいへ原津みハ海をうへりんや。靖り
るおとおれのみ限元禄はさハの玉ひし
ともや。宮ふいねうしきこ於しし小舟。あやし
く艄をたふとりてち風へささめわ風情も。
花橋のむうしめきておうしくうてふある
あしれ。黎婦ふゆしき。嶋邑のきわふてか

しら波の深みに網をすなどひ、籠の窓に
おとなひ籠の窓に飛入、籠の窓を出て、舷を掠(カスメ)
め舟に飛ぶさまざまそれぞれ。孤鶴の
東より西すなるもをかし。嗚呼何人ぞ。嘻々

[illegible]ヤヽ 比丘尼也

昔是[illegible]志まり。古の孫ぬる漁妻、舟のゆさまは
や。ちきりを結ふ又川舟のうれやまなざめま
せなれつる共ておすすめるれと。渠(カレ)をしくも
忠やいらん孝やハあるなむ。散て我としめんや。
流くく病日に益なき戯をしみ。彩りに
ふつりし己に愁て。悄し粛然として恐しくて。

舟を棹みし業おろかに。一唱の深くなきを忘て
　虎丸柳陰に濡まさや桃乃花
乃ふ琵琶海一千里に潮なく。わかのつらう花を成て
蛤ハ小咒人の泣わに楼をやゆるぎ其談に人をきゝや。
酒をくみ魚に肴を投うち。壱戯ならひ吹て

吹面不寒
楊柳風

ふなあそびの船より。楊柳を手折。三子ハ昂に京
に帰るをむ。其日帰り忠。天きらくしく。己
張の鶏ハ武蔵山を離し。其戯霧(キリ)。夜にの来れハ
野の花壇に寄て扁舟錦城の光ちらし。是
時甲辰三月三日

第五 雑話 盗人の禅

岐阜に栄る酒家多し。或夜賊来て窓を切りて酒蔵に這入りしに酒の良き程好に香る桶ありしかは柄杓を握ゑ呑を続けさまに呑みて身こゝへ其の上ひさまつく盗人幸に板をとりておこしふさぎ夜のあくるをも世のことも今の上もわすれはてて前後も泥酔と成りて生体なく柄杓を枕に熟睡しけり家主も日出るまで起きて蔵より内を覗きみれは大盗尓て長ありて男二十余人群あつめしを起こして居る故これ盗人出んとすれとも道なし此酒だ桶のみ桶司（トウジ）とも蔵に来るへし命を一寸延し（酒桶司也）嬉しいのやいのやと上戸を幸と躍んと足め荒縄を以て夫婦して手ころの丸木を捜し出して腰にさし尻をあらはし頭りに付けて蔵の戸をがらりと開き遠慮なく打ちたる尻を喰はらび居る大勢の前をはさ同もかゝす其一文字に大手をふりてよいくく急いくくと声をあくこのふこ付けて振りてある男とも起をつてこれは何ごとぢや何んぢや是なと来ると見るなり

まこと道人かも目つけすゝろびまれ忍いくゝと
此月斗静有りてをかり中戸を振りいで諸を
もあれして聴きける此時に一念信玄の志をあ
八角ノ磨盤 禅語也
も禅機に観念磨盤ハ空書を走り揮ふる
此道人乃丈夫をぞ必ずまさん

亡国タルハ 司馬子期也 戦國策
中山ノ君ハ一杯の羊羹をに国を亡ぼし家内ハ食
千喰へて道人を亡ぼ半あることは諸藝
観念窮不可佳境ありと背此に読く賛之

第六 真岐艸

再斯可之 夫子季文子云語
再ビ斯可也と八日く人のゝ人の宝成へし。一句を練る

まるくも秋なし此ぺる山の紅葉の蕾の咲出るも
ウタヽ 訟 未見内自訟者也
の價内ニ是つのり訟るの風色なれん。元文平子の秋を
しめれば是云よしゑ請待る。忠婦嗅洞あり杜府ゟ
お桂秋此何ゆしく久しく神ことやまりて例
有像帝を静かなる読風。名菜さゝへ湖をむまを
古を冷し新意を得をぐるゝ云事病ニ動りハ
腹菜を解ん其句ハ

岐ハ随て波を捨ぬ菜乃有
むはまし 世とつましと ゑハ[illegible]や みつのさの 名しきし世ら いろのゑてき
世の波乃らはるゝ語りて花ゟ観ても あまや。菜に
このりし九日の夕はつるき秋の離の苦しくも。静

後花の秋詠あり

にせんでうた句形も世にしやと尋ね寄る形。予云
ふ可也。此日の句は菊の月と云ふる人も稀なり
あり。世に下五文字を家にならべよ。それにつく十三
夜の月に似ひよせ。菓の字をたのむ句ひ世にふるらん。
後の月に菊やら月ともも結ひ合せて一句。往昔ならし

冨士の烟西行の歌の五文字をさし仍以下五文字をとゑと云より此こと歌ふあり筆力の余情あり

つ。蕉翁にありしは。おしよくこそ形さハ　「冨士の烟の
行末とかきりありしと申し。此ハ。名く奥に入ぬ
有る節ふさにいふて作配あるや。それとも佳杜甫
末て几座に眠りしは。其てふ向きめぐ様ある。附十三
日能　「後有る菓は有表式と。エ東大方に移して

五文字にくるしむ。昔らくて一指に痛し。いまみ使二指
にかれ。ふうて折りて何にそ三思にてこり世。今时
連俳の徒。六十一翁たり死て開きり。世人ハ云連俳は
別とは云句の上にして軽き論なる事。真味風流く

此間有真味欲弁已忘言陶渊明句

ハしく欲ス弁ント已忘言ヲ許ちと彩て古賢にせよりて。
五文字残画深かりとも。説話の句後進にあらん。
静におもふ。めしくハ是奇の達人有て、十三夜に菊を
むすひて一句残形さハ天下此吾を識んと

九夜十日九夜日まハ十日新治筑波そ連歌

「九ノ東十ヲ日の当りをきを下にして一句を指さて。用指
此的当にあらん乎。今十三夜ハいのふくと古る責

照らゝりか平家物語のつらね
謝公自有東山妓金屏笑坐如花人　李白
あそれどもこれりみをはくしの云なふく
住吉の浜と云まゝりて以来を
これの
まちらとの
志の御文をこの店かやすし読ハ人もまもされ
恵好

らきだもおこしも我ゝさりたり。幸ま十四夜到て
清光三秋の伴をはらまて　照らりながけいせいとりく
おまり。香きく柚なりして笑坐如花人と両み能く
しまのなみちりくまに遊ひ幸李　あそれども乃
法とひまいまゝも。上達アとさこゆ。称と。ワのやらふこと
古わまし幸我ゝハ。苑とくあのふへらめり。光晃はらと
徴しらけいせいとも見目もすき面りにも不幸ら
民の酒の友このき　聞まこことゝゝ我笑ゝ那せ
いゝくく人めも伲世ゝや。すみよしのを海まて抛てたら
人ゝふ一句ちに振ゝ世らと

小弁ニよせたる哥之作時恵好六十一日申の未決
小弁ハ伊賀人忠橘成忠の娘中宮ニ小弁重孫の時放蕩のれりむれあり

古人ニ我志ゝね一夜て秋乃月
茂ノ右通宗ノ孝言茂ノ知ニ房輔仁親王十三夜の月をは
しきて我ふとめくと毎。十四夜の清光を今更ゆくりと
例の相ハしく我くし王号ふ。頻りの日皇都山祖我備じ
よりひ我とと昌迪十三夜乃句之とゝく聞申
後なしと菊平やや夜寸の月
流ゝふ也ころき宇ゝふ奇我り。志ちゝく胸をこの里ひせ
かまかろくと袖をも志光に。連沈の境今日ニ家れもふ示
ふあくまり叶へ里。出の時絶唱佳作を守くてす。北野の神の

何事の秋をて
何事我秋をてなくてかうう
御教をおもひおふきね　何事我秋をて我うられあひ也

梓康のおも
ひえして毒
我ちらん
今昔集に
八幡の光清ヵ
歌
おぼえて歪
書見るも
又れすみ
うちて
すはけ
ゆるく
おとしろき
秋と云ころ
之

てまことにれしられ草にハはらくうらくとる。こゑ元書物を
とれさひ侍る。其文の末尾すこ年ら八月十五夜石山
源氏の間ニて
死ぬる明日本の月に自然にちひ哉
と云句ちと花のことも称嘆ることも統きとぞ

木の末の
渡天ノ末の
引歌

木のすゑをまちまち来る月の秋くれは
むはくしの秋ハきみにあり
古の歌あて一句とそのひあんらし。源氏の間にても
落年首へいのしと申さるるに山松[illegible]も驚れ
書添ここそ此の書あしに白斗書て居ころ統き添也

きこえるまことに奇妙の人なりけり。泊ノの巻に漂
をこし書き補とい来るハこの歌に多ふなるを世にまと

式部一名乃子ト
云勤修書家平
安女年信に
あり

「孫子ハいの高る神なりらん感涙もなさけも深く
和スルも流ささるもいとのうるとそ起。昔今の人の自ら
自ら何うし己丈も知るなるへし。去死なんと「荒に

孫ろくハものりとにて去死なんをのきさらきの望月の比二月十五日死ととと西行の歌く
此の歌ちすめて常月法法と上人ハ佛書のみハたのしきにて古を称すの
うさらハむのうと昌曲とあり去死んと云詞ヨ出しるとしうくの詩の文章の
いひあとさ
ん[illegible]へきら。碧流金波三五初此夜清明玉モ不如孫ふたく八月乃
と常に師の夜話アリ仍出之

碧流金波未ヘるを不死を世をたて生涯のたおあしめとぞ木の末の此間

三五初八月十五
夜陰亭子
院作え
菅淳茂
碧流ノ句ハ
起句玉不如
結句し七言律中略也

続説詩曲流縦語統篇序題之。読語の宗道未満庵
述く

篇序説曲流ハ家證書要とする事ありとて此五字當時訛語子曰く省へし
他ハ不知や

時こえ文あし飛のとし　九月仲旬

第七　楚ハ集四日經跋

書實時落
古今書名序
不落ハ誤語なれ

叙を見る拙ハ甚だ実時不落書中旬、甚た頒菜

ふ古人風雅く積被承や有乞食く客ハ以此為語

紹巴ハ一
戴恩記ニ出

斗ゝ謀さ被ハ称名院殿紹巴ハ乞食の客と称すとて

伝ゆるしなれるもありけるとて笑るれすく人を

さりけるのく事盈成へしあふ事ハ書房に移り

乞食ノ字
同ク古今
書名序

ふる乞食ハ非ざるハありうくえんゆて記さく老乞食

半時庵

第八　東賀へ贈る

繋月繋
日　文選

洛東かなゝ菓堂に題をして宿星をのせらるゝに月を照

日我繋きて黄緑の素意なり。老愚畫爾流にある

りれ。一室楼よりゆれ亭より似もし。園なりきるこその

周丕覺

日高丈五清
風生
各席全ヶ語

嘆ゝ呼へし日高さ事丈五なれとも。あゝし睡りく軒

濃かなり。菓なく門を和りく多嘆し。夜朦朧くとして清風

をむしてこゝ

第九　恵南律師稀年を賀

ゝ請ばよ残行の流をえみて誓りつる

久しく川みん星の未きらんかしと

伊勢の古法といひあるハ深く親しき言の
葉にも世に下ふて。あまりの日影に杖ひきて遊びかへし
待かし月。或は営の古き後をさぐれ家は時に庵を
うつしてあるてたちよるを。断一盃しれ志とる。誠に
短夜にみなこぼるゝをくらけ引来る人や。無上の道
を欲して不思名利をのし経に恵律師の寿来。
凡そ八九の春秋二ツ斗も。すらしても足る庵を
とみちの朝夕かしこやまての白ひをこゝろにおひて。
山のはなの高住。頗り知るこそ。人憩人をさひ。人
待人あらく。人まてる比ふく。何千は常ても

五文字常云く古語

矩を諭ぞ或るや法の衣

此下ある一閑人。齢をもまず子待つまでなるして。
四界の老人来り庵にて此詠呈ス
寺十　春日笛我好ひし人に々と人例ふ

発端想ノ字ハ北山法皇ヨリノ笛ト推老ヲ此三ヘ憶ニせるゑをみん頌へ

あらくへ来る家ハ忠しく行く毎。北山なる寺院ちかちち
うれて像る人の林なり。ゐる言さかうなとて。五六本六
七本営院寺の枯さ家は。我宅ハ添れなから
志深かりけれ。据出せ折りくたた古てとなとや。ほしくも
添ひ続くりやそれ茂我邪まなる限りさ毎。人家
千鶴来める斗。志らく春雷のひゞき渡りし

龍笛ノ 一名龍牙トモ云

いろあ乃姫 竹之御經

衣も。才にしぬさるをかくもいかにしたる竹くの牙
あはへ錦綳乃襟袪なうね。或ハ壁人の篆たと倒(サカ)
しやたきれし其爲粘ひ。穂先き孫勢ひハ龍をそ
ゆふ乃ゆうく紫莪奪ふ乃いろはり。所てハ龍くり
立まは角より。指ねしかとりれるり。おみなまし
至耳走りあって。いや。ひのちくへぼされ出ハせ
めと。彼さしくと引放て(ナ)ハ。まくあやしけに見
里。いの威姫を生出んと思ふ耳。世下にをりん
りとんひろまぺいさ子とめるにあるへんとはふ耳。
よと切教しるくちふ約親と名つけ。気よて繋

馬融笛ヲ能ク吹

考妣ハ父母也

乾竺に水龍となり。氣をあへ
まいらきけれむうし。ふけれ子の流ふれま まも今をき
はらなしや。あさらしく制するハ彼おもきくて怭き
しるれハ。沖中川乃ひと細きね龍浮ふ。ぶな耳ある
融たしして七孔をあらへ光龍吹しめハ。該跡竹葉
八音ふ敎りたるく。岸の枯葦ゆへをかへ。勢りをつき。
精列おわれ的ハ。甚れ目額く。秋夜ハ文的やをうらん。
流らく孝妣にかしはきくりさる龍覺うるあにく
ふ家も。信に叟所中ふ散ゆるとおや。いうて詔君
のおいさんたるを待もして。窮ち強ふなて中しく

うつめしかれ海。維ゝ又三月末巳にいさはらき

竹胎 竹ノ皮之

れる宝。竹胎の風流なれんやと隠士乃歌ふ

閑人清く銀なれ寔て謝ス

第十一　琵琶湖

琵琶あり膝に揚て弾ずる人なし。梧鉢の

ごとく波上に虹を架れば。柱の名を瀬田の橋と云

四絃一筋

九十日

四糸子ヲ四絃ニ擬ヘタリ

四絃一筋九十日。一曲終ふ日のあけぼのゝ春に還る。樹

動きて草燃え。氷鳥なれる日華三尺ニ尽ニ彩て環

を琢る。雪も氷も管の音清く巷にさはらぐ。梅ヶ

任侠 男伊達之

枝いとやさしく。任侠の踏ひ侍。ためゝ志て北より南に

肘を洗ふ玉乃臺の新堀なる恬好を梵字の牖の

らぬき。風を待つ。如意（芳ナリ）に拍子紛りて息吹き。桃李の

ダマリモノ 桃李不言

だまりものなる宮裏の閨の香。人なる投る。如さいつに

貴女あり。娥にありて采女にあるされた盃をとらん。

眉なる展風流愛すべし。纓弱く玉のつる光の髪

孫もところ 会ほ

のあそぶ花清く。ねりをそろへて裾あかぬ花の露。六国

子光 梅ノ一名

ちり来まさせる。独揺きていとしくよく。子光の花

九日ところ 長能カ歌ヲ元ス

なるなくて。胡を衣とさかり管弦と戯り。九日とも云

辛寒重。卯の花小さき亭なるあらひ。蘆清の樣

をとらふ。芽の輪乃やゝ波私風に諮る。桐葉荻なむ

楓葉荻花
三両声曲
琵琶行　楽天

時の熟せんは。三両声の曲をなさしむる風心すこし哀
れなり。雲に飛びて斗まで月日枝の空に印して暁ならや
至四時則弦となり楼が待ちぬるべし。此琵琶の大サ荊山の
かみに余れ。ともこし船をめぐり漕ぐ六十余里に

百年三万
六千日　李白

至り読む行に揺れる人。矢百人三百六十度。誰
か此琵琶を採りて弾ん。首陽しける人あり。維ちも

紫式部と
いふさるが
文法曲流
れ

在時の姫。本望宜孝の書。上東門院女房。紫式部つかの
て撥とし。湘上が抱て奏よくうたふ

いつまれのし
桐壺ノ発端

いつまれ御時の女御更衣のあまたさぶらひける中に
と彦が飛して家く一つし二御しをおなておほしと

おもひまされ
竹川ノ巻
折ノ語
よる人ゑ
石山観音之

そもれなりと也とうちひ慕ひまた。後へおこる人音あるさけ
て。石上光有水清く江干満。花も山陰にみちちりぬ。得し
納めて雲の影に隠し。雨の気をよくめぐりて日月
を我擁ひ。不二山のうへにありぬ

第十二　雑話　六章

一昔去光人とし御家には。白菓ならぬ山破月中にも
小車さ或大家より御知契れむりしおらに顕り読ふ
とり。破月なる極山は御家廃して後一たん御ありて移く
きくもし又ハ坂足斗おち待ちあり。微に此處に文左武

朝でに一初の
比夜えりけて
慕子流つかる
きそ境もき

の字えなく常平和安れ道が好き継ひそのうへ

土御門内大臣
此方の君の書
成へし

それ道筆の謀なく古人の工夫を上になしへ和漢の
珠を綴りひその道を継きつめ人も絶り世をも網ふ
斗の能書となり給ふうへ尊こそ相まとありて尋さ
らせたまふ武技をしめて雪ふりけれ其秋の明る哉
給うまゝひて此考あらましかやとおもひ添けてと
おもありて

其さは木清とはかし梅を折りそちて
あとさにつけぬ雪路のなしさ

御名を秘ふ忠平と号す京洛にて古文年前の句
又あらを改めしらぶ挙りふ乃月

とかくり晴ふあふくり野君内府公は御門弟と成り
給ふより古の一楼あれ一向さまかく硯をそなまなま
りたまふ心の儀青風の意水の清みつゝり月をと入井
れおもひよりそ御師範への問答の役は千里一躍に
著顕を能きて心以ても其枝をそらふの流をハあるし。
学ぞようくと語出ひくて今もしみ勤めたまふ文堂
とれはうらく家れ侍常なりし武門にはなつりき
あとまより是は先を究てむかし今ありなを加き
らひたまふて実くも称ありぬよりて此うへはそこや
の山乃本は下陰あはれ切りてあえうりなりともかな

家敷をさめ給ひをみよしおほ鳩神に祝せ給
うけ給ひ因府公をきちに責たまへるもあらんく
との御旨も年を重ねけり。時至り時ならし加り清敷
年やあり先代のうたを猶に神風の紀のり渡る日数
をかさねし。たゞくおもむきを陳ふるに奏聞深く
と御下知ありて家みつからかく清光祈て
抽しき数をそふて寄の数く御書を兼申し
たまふなりし。天機ちれくしく成りてに寄特の
ものゝ御心をもつて有りたまへる墨の匂ひをたよりそ
の水くきは常の外よそふるに数すくなからんや

と院宣成りし色なれば。因府公にも敷く恭なしと眉
をひらきおほきに悦しびて和歌の仰をかうふりてあらんたらん
みそ月さきあさ懃くてうこのひたすらへみなとか
く御説有て筆の紙のひ文字の姿をおこしても
うけたまはりあるし。歌は更に院宣なりりし共に大事
なりけれは。いかにとすを深くみかけて内府公より野君
へあけのすし仰合せられは。たゞくならみをあるて
とくあつかく有りたる事と先に佐々年数
積る日数懐日に弄すして詠寄し待る事の安
下なりきや。哥道の高き事今猶おゆたる

歌よむ翁とあまたの人ありて秀たる一首を
疑ハに謎にいひ出し座興御恵となりと申給ひ
しとかやんの人おとむけるて素人の堪なる
なるべしと知れあるもの心もかくぞまじへしに
禁古名人上那の外世にあるまじきにやとれ
こゝひまふけるゝに歌ハとえりハ余りなるものなり
とて挙紙捻りたると笑談有けり
一節五常に坊主とも不空姫のきゆる紙つらせるを
外四角に見る手に割て四面に割肩さしてさらに坊主
とも配當せける事常なり或は彩条の小性に

此木これもと作られし一大事の御用なりしに
と御次に出四角に割て四面の肩微塵も故
らとに割るる木の側に密なく御前へ出し奉れハ
御機嫌麗能しておうらく加れたるさのむされ仕方
ふとて作られしも坊主ともから割て指出すにかや
うの薬芥能とくふるまあり難ききこの
ことなり坊主とも加あまくと割出せよとある時側の
人とく割肩紙配當して作らしれはたうり紙
なれとられハ見てと作ありて暫思惟したまひ御
の人訖めして加くれなく遠ふ支ハと尋給ひたれ

さ。伽医者アゟ然ハ坊主衆ハ席裁包並て次〻の
御用とおとへれとの役ニ方あらん御形気を律義
ならハ活ニ席に足見せし仕事お次御用の也いかさ到ら
さるとアふ。候ても給たまひ。形気成おして坊主とも
ハ席執盈むまてあらん古人も竊(セツ)香と書並絵
貴ふに不及而しハあらハあり〳〵と御様姪おとられたら
ゑしかりけると然。御斎の道以ぅのみをは功並あらん
とおもひ侍る
一類元ニ於香阿弥勤ぬる席結裁並し給ひ御
用座〳〵ニ任候る。れとより真阿弥武阿京師ニ住

らあり公武の御勝ちうくまゐる者ありて人情の高
侭者へハやまぬせんとうろふひし所人々ニて大猷様の
高情者と世人にもてやし詠も渉つくし位(イタリ)足者と
能く奉りけり。文武共大猷御立国の時ハ此頃ゟの御た年
叶ひ御政法中なり妙。智明御自情の代ゟの好ニて
硯載ニ修付節のもやう花鳥共向ひを席絵共中ニ
松ちの山並川の傍以へさえなる筆共給ひ。御様姪
能りふかく札て。勤者をめし出さまその方今古く
名人と世ニ誉らる人〳〵おとられ感心の事なりけ
御称誉共くわり言外筆浅つゝ妙よりて御意有加

らくおもひ廻て。勤方の退く御家臣にむこのひ。唯今の御定出く世くありうらく露に神の秀志くて至志めやかにえそなる件しまりは先まよろく私義も常く御家しる事ハ危険らに存ますれとも又花の度様化此治家とは格お年来技情ますりて此度之御用も神以利益にかくりけ不申候ゆ御道具にあまり俳相ふと一筋く不滞義にある世と御一陣へ申る時節ニ御動父ニ志捻し真へ入らせたまひ御家臣を成めし。唯今至方へ勤方ろ申ふる一言きろくとひ至極之気。唯今方ぶ入義にむへ一領ぶへも入れ居うもんと接と申渡ぶへしとの御意也

御家臣ならびにおのおの作下されり趣意以の此事なと申上まいらすれハ其方分為ねとは申ねくくき一言也寧(ムシロ)盗をなおく屋ちや硯箱ハいの計の價にて申付たるを役人共合宇とりそのうへお射の價年何とへ一倍をまへし黄金義以のとて必一倍動方にまし仕るへしさればこそ折角工夫申しけりける拙者振り。道具にあらす。集りハ大名く義まいりて益をと貪星ててし渡世ともいふへし。そのうへ好事なれは用る方にも主し貿営まは御屋し。御家の此度此細工にも神以利益にはかくりけ如く擬義をていひ仕るに益なきに仕りハ背まし

何そ楽ありか世益の理ありへ例に是非きくな
くんれ共にむむさくて浅ましき心なし。此度乃硯箱に
て三年たちりも他の事なくて渡世殺々なくして
了たる衣おし抱好も無智へし。なくさみてもんよ
うらん利欲強外と云道具を居宅になりれ排斥
の一言先よ何ても入強とあよと了付るとも何ゟま
るる。勘太つすこく京へ帰りんをと清あり魂が刺さらり
のおもひおまとをも是非なく。那波殊明へまいり物て。此
時そ町人の言清とおもひまふるハ何のやくふるね
る者下卑なる中ふていひちちれもひかちなり。さこの

其後節目あまたつしれとのハなし。也蹄君ハ貴人
の貴なる其の清事那うりかく其外者両と於ても京
両と云も中々懲さりて我をも家とれとふりと額に
汗をゆるんなるゝ何ら清ね入なりても内外不立と那
波へ相伝。三年たちり経て清すれ御般免被ねてもの
とく勘太は清ね入中なるを聞殊明ハ源氏物りふそく蹄君
へ清ね強ひ中なるとそ表語ありなる。源氏物りと表語有れ
中より定て殊不我殊明はなくあり清りれると唯し
を定清る中その事と暫くためらひ志あどもそれと
たくやみたり。同しくも殊明源氏物りある也へ不定の

不能ぬなく清語もあれうしざ□らぬ白ひ有へし
とのうら八常平心うけ来れとる也 ○ こまつへ平
きらちておもひうけ寄きさいちいやうりあるあし
ともおほうりしなと以无まへてふきぐくしたる
よれへきなありやてろうひ給ふ夜と人の以
たんやうまんえ乃作らるくとて中ねふくむた
るて未て不定
然し乃て吏人の怒り八やゝあ安かるへし況や風雅の
君世乃言え粗
一白居易八子をさゝして枕ふ残る葉ばうらむと

訊ふより白氏文集ん技法をて見侍りたる平似たる
事も如しいのありぬ数事ふ有年やらんい梅かのし
一今生?て行能津ふ在るの八愚好并謡乃作者と以
事八嬰児も常平口すさむ事あり此外上留り
中興の祖と云大雪說經かうりて八加賀掾と云しを
の掾?そは摂?及ひ義太夫後筑後と云者也其末
流らもの章(ユリハリ)の工夫た骨ぬ離まて志らも本意と流
義を失八さる事の揖焉(イチエンこ)あるうこのや
一芭蕉翁純中行能つふ在へし是八蕉翁乃骨子と云
てぃ翁をうりて其心能失ひ芭叟の正道能首てたを

賣利を得るに隨まし適て其力有れ連中も芭蕉風
とかやいふものをおこなひ泥(ナヅ)まらしむれハ是非なき境
也蕉翁今あらハみつから庭を失ひ発死すへし

犢鼻褌 フントシ

第十三 犢鼻褌(トクビシ)を贈る辞

児ノ事良運記ニ見ヘタリ

比叡山の児ハあしく里に居しける帰りけれハ老
師乃ふるさより七月七日縞(シュキヌ)六尺をかさね贈るとて
これなしと星へさゝけし犢鼻褌(フンドシ)を
　目枝(ヒエ)よりお誠乃瀧乃むすひ糸
と詠て横乃細布を贈りけると於ゝ元盛なる思
ひ合せ承かし日の本ハ中ゟも陰陽をよくしのへる

国民の常なり既に黒く下ハ白きと真あるハし
世ゆゑあるところを。羞(シウ)子おろそかに。惜哉文花
の一係ぐ文むを破るの徒ありけんかし。あれ包こそれ
すそめくそろく法用ひるて。貴人をも相二尊ちり
めんハ瘡をせるて国縮まれてせすも。さとしれ詞
のはしをむすひたりけり

さとり 悟

第十四 佳珠旅宿へ贈る文

昨夜即佛之急き出て御立りハ貴。御念之以て
まして今朝より風寿存す
京都に共に於ひ共に難彼にかくり。月なく嚴鴻

白酒初熟山中帰　李白

ふまふて。隴上條あく草庵のむろ酒熟するに
間ぬく。更に續皇して波の雲早ゆくり。大和記
や古き綴ゐて皇都に出て。にはより武陽に
ゆるのとしもむこと来るを遊れ来る遠し。ある人

声トよふと移する文曲九

ハんあるところのわりむきや。契りハむらくしとて雨
もふりされ。様て今夜を諦けぬ誰ともなる
めすんとか乃為忠の事ぬもうらみめ乃紙。絹お
ととひ定て

呑くハ院呑和日鎮し　稚拾
志うく乃とも来とも存りなる真ノ遊びて氣

必ず兄合残しとそこそ参らへらし

九月廿七日

ゐしにそ来年八椿八千あり椿八
実伴ふ八残しも春入はにほんね
てとあつしもし

廿十五　絶陽分樹亭ニ於ふ

李清蓮八王右軍ノ語分樹然本故変陽首九仍変句ニ換雅ノ心有

分樹李清ト真卿あるしに年有り誹諧の句をなひて
或残る紫里れ日宴に於ふ愛をとも無く残るともな
絶小座の景あれ僕风を学み雨を合む。北より来
る風の句ひハ冬　君恩有冥君風よりもましし

南よりおのほうう廉人の薫しぬ風吹来りて四時
経よくこしをつくりの紀らし的経九条之内府之
をさみをゑひしおほくの人紀羊の海と藻塩ぐく
その舞ふあるしれこの海浜に来りして。竹を友とし
紀露を掬して生涯を草にて枕風情。節を友て

ワかの浦ハ多くの人の筆乃御中にもへふも藻塩うくらし　後九条殿乃御

ゆるをしらるゝ袖乃千吉庐として才ぐ眠。ならんさあて

スチハチワガロ乃吉庐老杜カ句

飛ぶる紀鶴紀其ハなし来て乃蝉

才十六　羊秋をたる書を舞ふ

歌の家紀の名世の一如しハ蕉翁藜杖をとゞろ
紀名紀えたり。瑞紀梧の葉をちらうき

やうん。香稲庵羊秋乃初紅御ハ和奇まらうし紀ま
らう山しるし出らち一家むらし。出らう主吉の亀の袋
と号け子ら家古弥陀を道るを見ハ志主砥らす草の草
居士な吉備の中山おく紀細石六ツを探し来る
その之。松浦の瀬を洗ひ後家浦渚紀瀬尤し立れ磯乃
香一二の名紀夕陽妹脊山の暁。昔今おもむきをれ
てられよおとし経き長途なりんとアぬくさあ
作る

羊之名亀之袋は二雨を家ら家の風雅宝之基後ノをなふ古記ラ云ん

京へ後て参考辺花の歌

嘗享保十六年辛亥三月下旬空きらく

明らかや

第十七 病臥并蜆賣

発端文選 風俗ノ詰

嵯峨ハ廣ノ人の風なり。憩ふハ松栖の下に籬ひ本残
伐林茶を精製し竹を吹切り、竹を割る笥(タカムラ)ふき
切りまで、切口刻み花を合て自然に調ふ。笹のごとく
是非波に似たり。借れ情に遠くぞとより罪あれ
習ひとらむるにあれば、或ハ皺によつてのひ絃に似たま
氷ある身に似るへきやうなれ。清く冷く霜巷に似
へむとのなし。似たる家とのあるぞ。庄八と云四十余りの

庄八ハ 蜆賣之

大男、津軽赤き髪ハちらして、俵くされ汐をはらぶ

茶話ハ 梁葵ノ古事

日の五ツの時をさゝえ芦庵の門外を過る。其
声をして呼はく、鉢巻を起し

「売くめエ 「大ありう 擾てさかしても
「身も 「おほきな 刃と 「身と

余念なくある限り大音声まうかよぶ。実に泥ゐる
の一ふしあるへくと実くに珍し

一升ハ幸左衛より来て取り
蜆子飯盆の一句一升一生さしめなれ境界那
うつ昔なし、来ればこ舌ひ健(スコヤカ)にして世をわたさ
報波も種くぞし。これ平生に続る庄八我々六十

又六つ斗々殺さへつまゝ捨て若このちかひに擬ゝし幸
此壽も毛も散り行き消へるゝ蓬へぬ朝夕の臨ミ。犬

大王ノ風又宋玉カ言之

王の風もしむて結ある八陋窓よ吹来て病を愈し
耗を寧(ヤスメ)よ。日の日此日もかゝに重しれ秋よそ

カなる蝦背ぬきみゝを信る系

有きかかれなる蝦(カヘル)背ぬれみくもぞ。おく嗆醋(カンサク)とん
来くまくも愁(オンゾイ)よ死生辛(シハ)ひして長月もいね免ア。基
も続く新り芸り

頬陂海信る系

「擬しぬ身「よしぬ雛「小き」うしも
「身も　なんぞ此海ちんたれちの行端よの芸り
と拵く脈。さすて志な石に新すまて一松一栢ぬの蔓ふ

百川朝水ハ師ノ居士名ニナリ比蕪寺朴道禅師ニ参ス

元文五季秋下　淡々百川朝水居士木槿窟ニ記之

才十八　為天子将る示教

詩を詰む長刀　和歌八刀　是寄を括差　詠詩を
桐足也林しんて短刀を利遠く見れとをするや給亡

寫氏カ皷ニ隠公を弑 左傳ニ出 荊軻カ事 史記

一椄よく向を定めハ内え时ゟ至て来て功成ゟ寫氏
久館平て隠公を弑し荊軻を始至れ孫とく
寄ゝ至此时徒長刀ゟれさしなゝれ側へるゝ事
なるゆし短刀を国平をたまれこ伝一包なら
ハなしるゝ至此时秦王の佩ゝる剱此長きよりた

ちは接事何ぞたを髪無且は葉嚢なくとも剣
絶ゆへしさればこそ根ありれを恐るへのし給ふ。能々修
めて心を定めなは藝道何ツ而を求むる事なし
唯見性なしるは其的数指あへしあらく用ひ合
話説ハ昇俗は論ずる事はやし侍て言紀ふん
をゑて非似の教へ儒朝の道をすてむへ記して
ぞされたる中興流道之祖花咲社之貞徳季吟
芭蕉翁其角引下て陋悪ありて道統あり時々修
而今此輩押なべて業をなすふ點掻并数説之
蕉倒式新古式本式及褒貶之令捌きの三ツ物

撰集並花古式之令を教ゆ上ミ能ゝ慎むべし
古ミ遠恵この方はくは他門よりも正統有へし不
知るものはもの論ずるは尤余る程を教ゆなきハ。既に
之外をも有品数あり序跋并撰者之掌記書
月花れりしろくは本との論説文章も事ゝ員
純らな句をも一句稿の穂むすびし芸人の穂水かくぞ
生の句神庵花やと慕ひて芸人まれる每数くし
うんやく和は竿秋へ凡領をも譲りは時もなき衣
の出所の芸人やす作りし此芸人の穂をも芸人の芽なる
穂とありくるやと読しなも芸事。人来くるいと

ちらて忘らしに一通乃清晴梅咲名も高き鶯
林のとうちきこみ出るかくまてかくや花
策へたまへ

東附庵

澗之文集巻第一終